

なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2019年冬

136



特集 「気候変動と貧困」セミナーから



JAFS

since 1979
公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society



● 主な目次 ●

「巻頭言」労働組合運動と社会貢献活動	02
特集＝「気候変動と貧困」セミナーから	
「市民参加で環境保全を」宣言	04～07
こう取り組んだ——参加者に聞く	08～10
AFS メンバーの活動	10・11
理系大学生のネパール初研修記	12
京都暁星高校が水道ワークキャンプ	13
JAFS 40周年を前に ①水支援は今…	14・15
「海外からの報告」フィリピン	16
アジア市民大学、1月開講	17
井戸寄贈報告	18～21
「JAFS プラザ」＝国内の活動	22～26
新会員獲得の秘訣を教わる／アジアン・	
チャリティ・フェスティバル／森のサロン	
でデュオ・コンサート／歴史・文化を訪ね	
て…みんなで歩きました／天平のカリスマ	
僧・行基さんに学ぼう 他	
「新・The 社会貢献」法人会員紹介	27
新入会員紹介・領収報告	28・29
「里子の笑顔」「アジアの友から」	30
「環境コラム」	31

巻頭言

私もパナソニックグループ労連とアジア協会アジア友の会（JAFS）との関係は、前身の一つである松下電器労組が昭和56（1981）年に始めた「インドに井戸を贈る運動」を起源とする。

当時の記録を読み返すと、金属産業の労働組合組織であるIMF・JC（金属労協）の研修会場である「関西セミナーハウス」の所長が、松下電器労組の執行委員長宛に協力の依頼の手紙を送ったことがきっかけと記されている。

労働組合運動と社会貢献活動



福澤 邦治
パナソニックグループ労働組合連合会
副中央執行委員長
アジア協会アジア友の会理事

（'82）年、松下電器労組第1号井戸の資金を寄贈したことを皮切りに労組全体に広がり、多くの井戸の寄贈につながった。

以降、松下電器労組が海外ボランティア活動を進めるにあたっては、①援助を受ける側の人たちが何を望んでいるのか②活動が長期的に見て現地の人々の自立につながるものか③活動を通じて、私たち自身が学べたことは何かなど、現地視察も踏まえた論議が行われている。

松下電器労組は昭和41（'66）年以降、企業内部中心の活動から、広く外に目を向けて社会に役立つ活動を展開しようとボランティア活動の取り組みを進めており、担当執行委員は、青年が海外に目を向けることの重要性を感じ、海外ボランティアのよい活動がないかと問題意識をもっていた矢先に先の手紙が舞い込んだそう。

その松下電器労組の歴史を引き継ぐパナソニックグループ労連は、2012年に松下電工労連、三洋電機労連と合流し、グループ企業126の組合が集う大きな組織に移行した。移行後も、社会貢献活動を社会の役に立つ大切な労働運動の一つと位置付け、「自然・環境保全」「災害復興支援」「社会問題解決」の3つの領域で日本国内を中心に、加盟組合が行う社会貢献活動の支援や、国内外における災害救援のカン

パ活動、外部団体の社会貢献活動への支援を続けている。災害復興支援の取り組みでは、JAFSと連携して東日本大震災復興支援のボランティア活動とあわせたスタディツアーを毎年開催している。

会社がグローバルに事業活動を進めるなか、労働組合の国際交流や国際貢献に関する活動としては、組合員一人ひとりが自らの発意で、JAFSをはじめとする、NPO・NGO団体が主催するスタディツアーなどに参加できるよう情報発信することや、団体の活動を間接的にサポートする運動を重点的に展開している。今後は、組合員の国内外の社会貢献に対する意識をより高めること、40年近く前、先人が切り開いた途上国での学校や井戸の建設など、組合員が現地に身をおいて支援活動に参加し共に学び、現地のお役に立っている活動にも再挑戦したいと思う。

アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、井戸建設（累計1949基）や植林（累計253万本）、子ども教育支援を中心に活動しています。

全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <https://jafs.or.jp>

本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

● プロフィール ●

ふくざわ・くにはる 1968年、三重県生まれ。91年、京都産業大学経済学部卒、松下電器産業（現パナソニック）入社、2012年、パナソニックグループ労働組合連合会書記長に就任、現在、副中央執行委員長。2016年よりアジア協会アジア友の会理事。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的な人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

- 一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
 - 一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。
 - 一、地球の自然環境を大切に守ります。
 - 一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。
 - 一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。
- 以上

気候変動と貧困 乗り越えよう



アジアの貧困層を支援するNGOのリーダーを育成し、明日への課題を話し合う「第28回アジア国際ネットワークセミナー」（公益社団法人アジア協会アジアの会（略称JAFS）主催）が2018年10月6日から4日間、マレーシアのペナンで開かれた。今回のテーマは「気候変動と貧困」。猛暑のこの年は日本で大型の台風や局地的豪雨、地震などの被害が相次いだ。アジア各地の参加者からも、同様の自然災害の被害と支援の取り組みが報告された。「東洋の真珠」と呼ばれる地元のペナン島でウミガメや野ザルが環境の悪化で生存を脅かされている実態がスクリーンに映された。NGOの果たすべき役割について活発な議論を重ね、「気候変動の災厄は私たち人間がもたらしたものであり、その回復には市民の自覚と関与（コミットメント）が必要だ」との認識で一致。草の根レベルでリサイクルや省エネ、有機農業などの取り組みを進め、地域社会、自治体、政府に働きかけて次世代に引き継げる環境の保全を進めようとの大会宣言を採択した。（JAFS広報企画委員長 法花敏郎）

市民参加で環境保全を 参加11カ国宣言

会場はペナンの市の聖アン教会の集会室。マレー半島西側の小高い丘のふもとにのびのびと広がる農園の跡地に教会やホテル、宿泊施設など16の建物があり、6000人が収容できる。ペナン島は二つの橋で結ばれている。

「いま地球は破局の頂点」

セミナーの参加者はインド、日本、インドネシア、カンボジア、スリランカ、

タイ、ネパール、シンガポール、バンダラデシュ、フィリピン、マレーシアの11カ国からの81人。

10月6日朝、曇り空。前夜から泊まり込んでいた参加者たちが教会に集まり、そろって朝食。セミナーは午前9時、鐘の音の合図で開会した。

ペナン州の環境大臣、ピー・ブン・ホーさんが「ようこそペナンへ」と歓迎のあいさつ。ホーさんは、観光客の増加と企業の進出で発展するペナンでも、大量消費のもたらす膨大な廃棄物が河川や海を汚染する現実に触れ、「自然はみんなのもの。富める人たちが好き放題をして環境を破壊するのは許しません。河川や海への廃棄物の投棄は強力な法で規制します」と自らの立場を表明。そのうえで、環境保護の取り組みには市民一人一人の関与（コミットメント）が欠かせないことを強調した。その一例として、選挙の際に街角に貼られるポスターや企業の古い看板などを捨てずにエコバックに再生して利用し、その売り上げで貧しい人を援助している取り組みを紹介し、会場の参加者にエコバックを配った。

JAFS創設者の村上公彦・専務理事は「アジア各地の皆さんと再会できてうれしい。若いメンバーが増えていくのは心強い限りです。活発な議論を許しません。河川や海への廃棄物の投棄は強力な法で規制します」と自らの立場を表明。そのうえで、環境保護の取り組みには市民一人一人の関与（コミットメント）が欠かせないことを強調した。その一例として、選挙の際に街角に貼られるポスターや企業の古い看板などを捨てずにエコバックに再生して利用し、その売り上げで貧しい人を援助している取り組みを紹介し、会場の参加者にエコバックを配った。

期待しています」とあいさつした。マレーシアのカトリック教会・環境管理委員会代表のクレア・ウエストウッドさんは「気候変動に対する地域社会の回復力の構築」との表題で基調講演。経済発展と大量消費社会の到来で大気中の二酸化炭素が増えて地球の気温が上がり、干ばつ、海面の上昇、洪水などの被害が世界各地で相次いでいることを、写真やグラフで説明した。

地球温暖化の国際ルール「パリ協定」（2015年）が産業革命以降の気温上昇を2度未満、できれば1.5度までに抑えることを目指していることも紹介。「地球の気温が1度上がるだけで、海面の上昇、熱波や干ばつなどが起き、食糧不足をもたらすだろう。今、私たちは地球の破局の頂点にいる」と警告した。

そのうえで、「気候変動をもたらしたのは私たち人間の活動だ。それゆえ、私たち自身がすべての分野で温室効果ガス削減に取り組まなければならない」と話した。重要なことは「災害への備えと回復力のある地域社会づくり」であり、具体的な取り組みとして、リサイクル（再利用）、おがくずなど動植物から生まれた再生利用可能な

各国から被害報告と提言

セミナーではこの後、気候変動や開発が環境に及ぼす影響と各地のNGOの取り組みが報告された。地元のマレーシアからは、開発で森を追われて生息数が激減したペナン島の野ザルや、温暖化で海岸に産んだウミガメの卵が干からびてかえらなかつた事例の報告があった。

インドネシアからは、わずか2年で海岸が侵食されて荒廃したリゾート地の調査報告があった。

インド、ネパール、スリランカ、タイ、フィリピンから局地的な豪雨や台風による洪水、地滑り、家屋倒壊の被害とその救援活動の報告があった。2018年の気候について「最近、1か月に2度も洪水があった」（タイ）「今年は雨の日が異様に多い」（カンボジア）など天候の異変を指摘する報告が目立った。

会場の聖アン教会の前に集ったアジア国際ネットワークセミナーの各国参加者たち。10月6日、マレーシア、ペナン州本島

日本からはJAFSの柿島裕事務局次長が、2018年7月に死者・行方不明約230人を出した西日本豪雨



わずか2年で砂浜がすっかり侵食されたインドネシア・バリ島のリゾート地。記念撮影に訪れた日本人の新婚カップルが、ぼう然とたたずんでいた＝シディ・トルカーさん提供



すみかの森を開発で追われ、生息数が激減しているベナン島の野ザル、ダスキー・リーフ・モンキー
＝アンドリュウ・ヒューさん提供

その一人、AFSマレーシアのフランチェスカさんは、参加者に配られた手提げ袋が再生品であること、その販売収益を貧しい人の支援に充てていることを説明したうえで、「ベナンのお土産店やスーパーに行っても、ビニール袋は受け取らないでね。品物はこの袋に入れてください」と呼びかけた。日本のグループも、この呼びかけに同調し、「もったいない」の精神を日常生活に生かして省エネを推進しようとの考えを表明した。

「貧者・弱者に深刻な影響」

タイから参加したソラ・ポーン・大会宣言委員長（AFSランパン代表）は、気候変動と貧困について「日本のような先進国は災害への備えが進んでいる。富める人はどこへでも逃げられるし、たとえ自宅が壊れても自力で再建できる。しかし、発展途上国の災害への備えや復旧の取り組みは十分だ。貧しい人は逃げ場も自力再建のお金もない。つまり、災害は貧者や弱者により大きく影響するのです」と語った。今後の取り組みについては「まず、人々の意識を変えねばなりません。私たちが慣れ親しんでいる電気や

や、9月に近畿を直撃した台風21号の被害をスライドで説明した。セミナーは、アジア各地で頻発するこうした災害の報告を踏まえ、気候変動に対するNGOの今後の取り組みについて、11の参加国が8つのグループに分かれて熱心に討議した。

マレーシア、インドネシアの参加者グループは「大量消費社会のライフスタイルの見直し」を提言し、「Reuse」（再利用）「Reduce」（減じる）「Recycle」（廃物再生利用）の3つのRをキーワードに、生活をシンプルにするよう呼びかけた。

言した。

今年バリ島でセミナー

メンバー相互の交流を深めるカルチャーナイト（夜の文化祭）が開かれたのは中日の10月7日夜。各国の参加者があでやかな服装に身を包んで、お国自慢の伝統舞踊や歌を披露した。インドからは金のネックレスに真紅の民族衣装の女性と白い帽子姿の男性のカップルが結婚式で舞う「金の踊り」を愛情表現豊かに踊った。タイの参加者たちは1992年の日本のヒット曲「島唄」をタイ風に変えた歌「あなたに花を」を熱唱。日本の参加者13人は浴衣姿で「炭坑節」を踊った。2019年のアジア国際ネットワークショップはインドネシアのバリ島で開かれる。

なっている。都市部では熱波、水不足、嵐や豪雨が増えて経済活動や生態系に深刻な影響を及ぼし、地方でも食の安全性、水の供給、橋や道路などのインフラの破壊をもたらし、貧困層とその地域社会により深刻な影響を与える」としている。

具体的な取り組みとしては、①地域社会に住む私たち自身が気候変動とその影響について自覚する。私たち自身がこの問題にかかわり、気候変動の影響を最小化するモデル地区となる②地域社会が（災害からの）回復力を持つように準備し、地域の知恵に基づいた実践に取り組む③（気候変動への）政策について自治体、次いで政府レベルとの交渉を重ね、気候変動の回復力を構築する道筋をつける。私たちの取り組みを地球規模に広げよう」と提

ガスの使用を節約したり、プラスチックを再利用することはとても重要です。人類がもたらした災厄は、私たちみんなの手でなくさねばなりません。環境保護に対する人々の能力を高めること、それには教育の果たす役割が重要です」と話した。

フィリピンのジーナ・ヤップAFS国際事務局長は、地球温暖化がもたらす資源の枯渇の危険性を指摘した。「地球温暖化の危険と混沌から、私たち自身で身を守らねばならない。そのためには次世代に継承する資源を管理・保護する政策の立案と実践が重要だ」と述べた。

セミナーではこのほか、大阪府が集めた放置自転車アジアの人たちに贈る「サイクル・エイド」事業担当のJAFSメンバー、橋本隆さんが、昨年

12月、バンコクに自転車350台、椅子2台を送ったこと、今後カンボジアに370台を贈ることを報告した。

「アジア国際ネットワークショップ」は「貧困なき一つのアジア」の現を基本テーマに掲げている。昨年7月、西日本を襲った豪雨は、各地の短期の雨量記録を塗り替えた。全国で猛暑日が相次ぎ、埼玉県熊谷市で41・1度の日本最高気温を記録した。9月4日の台風21号では関西空港が水没した。2日後に北海道地震が起きている。セミナーでは同じような自然災害がアジア各地で頻発していることを確認。「気候変動と貧困」はタイムリーなテーマだった。

セミナーは最終日の9日、大会宣言を採択した。宣言は「人類が引き起こした気候変動の影響が年ごとにひどく

浴衣と炭坑節で交流深めたカルチャーナイト

ネットワークショップセミナーは、各年度のテーマは違いますが、「貧困なきアジア社会の実現」とのスローガンの下、各国の人々が集い、数日間共同生活をする事で、友情と信頼を高めることに重要な役割を果たしています。インターネットやSNSの発達した今日こそ、逆

にFace to Faceのつながりが重要視されていると思います。このセミナーは、全体会議やグループ討議なども重要ですが、それと同様に重要なのが、国別文化交流会といえるカルチャーナイトや、公式行事が終わったからの飲み会です。今年度のカルチャーナイトは、1

カ国1つの踊りと1つの歌と決められたので、日本チームは全員が浴衣姿で炭坑節を踊り、次に橋本隆元理事が河内音頭を歌い、他の日本人は全員で「エンヤコラセーコラセードッコイセー」の合いの手を入れました。全員が浴衣姿になったのは今回初めてだったので、大喝采を受けま

した。他の参加国もそれぞれの民族衣装で踊りや歌を披露し、大いに盛り上がりました。

アジア人のほとんどは英語を母国語としていません。そのため、アルコールが入った席でも、相手に分かるようにゆっくりしゃべります。英語の下手な日本人でもなんとかついていけるレベルです。そのことがお互いの理解につながっています。（JAFS常任理事 西田貞之）

私たちはこう取り組んだ

セミナーの参加者に聞く

アジア国際ネットワークセミナーでは気候変動がもたらしたとみられる異常気象や生態系の変化と地震などの自然災害の被害の報告が相次いだ。各地のJAFSの提携団体はこうした災害にどう対応したのか。参加者たちに聞いた。
(インタビュール法花敏郎、JAFSスタッフ・熱田典子)



生存脅かされるサルとウミガメ

アンドリュウ・ヒューさん

高校教師 (マレーシア)

2年ほど前、ペナン島で環境汚染が深刻になっていくことを新聞で知り、島の漁師、環境保護に取り組んでいる人々に1年がかりで話を聞きました。漁師たちの話では、高層マンションやハイウェイの建設、海面の埋め立てなどで漁場が減少。漁獲量は減る一方で

す。海が濁り、漁師は沖へ沖へと追いやられています。沖に出るには大きな船が必要ですが、零細業者が多く、とてもそんなお金がありません。思い余った漁師たちは2017年1月14日、州政府と開発業者に改善を求めて約50艘の漁船で海上デモをしました。はかばかしい進展はありません。

ペナン島では、野生動物が次々と住みかを奪われています。その一つが、ダスキー・リーフ・モンキーと呼ばれる、両目の周りが白く円状になっているかわいらしいサルです。生息数が減り、電線による感電死、車にひかれるなどの被害も出ています。

見逃してならないのは気候変動が及ぼす生態系の変化です。ある海岸ではウミガメが卵を生んだ砂浜が気温の上昇で熱くなり、かなりの卵がひからびて、ふ化できませんでした。ふ化しても卵の温度が高いためメスが増え、オスが減っています。地球温暖化の影響でしょう。私の集め

た写真やビデオを展示会で公開して環境保護の大切さを訴えるつもりです。



海岸が侵食されリゾート台無し

シディ・トルカーさん

ディアナプラー大学 (インドネシア)

バリ島南部の小さな漁村で2004年から、学生たちとともにマングローブの植林を続けています。これまでに1万本を植えました。稚魚のゆりかごとなるだけではなく、津波の防波堤にもなります。

この漁村からそう遠くないリゾート地の海岸が環境の変化でさびれていると聞き、9月、バイクを走らせて現地

どの症状が見られました。750人に薬を投与しました。食料、毛布、蚊取り線香、ろうそくなどを配りました。災害がひどかったのは、橋が古くて高さ約5メートル、たちまち水没して救援の手が届きにくいからです。モンスーン期間の3カ月は、川の氾濫で毎年孤立を強いられています。

ういところでした。私たちはこれまで州政府に橋の建て替えを要望し続けていますが、なしのつぶてです。今、自分たちでセメントを購入し、新しい橋をつくらうと考えているところです。温暖化防止のため、植林ボランティア、リサイクル、カーシェアなどに取り組んで余計なエネルギーやプラスチックを使わないように心がけてはどうでしょう。そうした取り組みが、母なる自然を守る第一歩だと思っております。



豪雨被害の村で

懸命の救援活動

デイリップ・バルサガデさん

SPARSH代表 (インド)

8月5日夜、私たちの住むガツチロリ地区は激しい雨に見舞われました。自宅から200メートル離れたバルラガル村のメンバーから「村が水浸しになっていく」との電話がありました。村への唯一通じる橋が水没するのを恐れた私は直ちに12人の救援隊を組み、6台のオートバイに食料を積んで現地向かかせました。妻と2人の医者、看護師を乗せてマイカーで後を追いました。

200村が浸水被害を受けました。橋は流され、田んぼは水没し、家畜も死に絶えました。民家100戸以上が崩れ落ちたり破損し、住民は学校や寺院に避難しました。3カ所の診療所を設け、1400人の住民の健康診断をしました。マラリア、高熱、象皮病な



津波のこわさを

子どもに教える

シャフウィナさん

AFSアチェ代表 (インドネシア)

16万8000人の死者・行方不明者が出た2004年12月のスマトラ沖地震の時は京大農学部留學生でした。いとこが2人死亡しました。弟が撮ったアチエの被災地の写真を神戸や京都

で展示して募金を集め、本やカバンを現地の子どもたちに送りました。

去年、アチエに戻り、大学で防災教育を教えるかたわら、小学校で地震と津波の怖さを教え、子どもたちが国内外の震災被災地に絵葉書を送る活動も続けています。「泣かないで」「がんばってね」。そんなメッセージをメールやインドネシア・スラウエシ島の子どもたちに送って励ましました。

インドネシアでは1907年にも大地震がありました。人口の9割が亡くなったシムル島では、津波の怖さを伝える「Smong」という歌を作りしました。「村は海の底に沈んでしまいました」「地震で海の水が引いたら、とにかく高いところを探そう」。避難の教えが美しいメロディーとともに伝えられています。

スマトラ沖地震・津波のとき、シムル島の人々はいち早く高台に逃げ、

へ行きました。長さ約40メートルのリゾート地の海岸の大部分が幅25メートルにわたって侵食されていました。農民が豊作を祈願するヒンズー教の寺院は門前の二つの像だけを残して倒壊。3階建てのホテルも壊れて閉鎖。プールは見るも無残な姿でした。周囲の水田は砂と塩水をかぶって荒れ果て、売店は一軒残っているだけでした。

そのおばさんに聞くと、「米は作れず、今では観光客は日に2人か3人。でも、ここよりほかに行くところがないのです」。そう言って嘆いていました。

ウエディングドレスと黒の礼服に着飾った日本の新婚カップルが、こんな事情を知らずに、記念撮影するためにこの海岸にやって来ました。カメラマンは「ここは以前にも来ています。なんでこんなことに……」と言って天を仰いでいました。

漁民の話では、海岸の侵食が始まったのは2年前。「毎日のように高波が押し寄せた」と話しています。地球温暖化によって海面が上がったのも原因の一つと考えています。バリを訪れるツーリストが増え、観光船が1日40便に増えたことも関係しているのかもしれない。

地元の新聞に記事を書き、大学で生徒にも教えています。フェイスブックにも投稿して世界の人に自然破壊の恐ろしさを伝えたいと思っています。

犠牲者はわずか7人でした。「Smongの奇跡」と呼ばれています。今年9月28日に起きたスラウエシ島の地震・津波では、残念ながらこの教訓は生かされず、多数の死者・行方不明者が出ています。震災教育の大切さを痛感しています。



台風被害を機に

環境保全を訴え

ドナルド・アントイさん

AFSパندان (フィリピン)

2013年11月、8千人近い死者・行方不明者を出した台風ヨランダ(海燕)が通過したときは父と2人で住んでいた家が強風でガタガタと揺れました。家が倒壊した近所の2家族8人の避難所に提供。被害のひどかった家の修理や再建を手伝い、食料、薬を配り、壊れた100隻以上のボートを修理しました。大勢の人たちが私たちの

気候変動に関する AFS メンバーの活動 アンケート回答から

気候変動はもはや単なる科学予測ではない。今や世界中の人が、毎日のニュース、食卓の食べ物、熱波や豪雨などから日々経験していることだ。AFSメンバーの多くが気候変動適応に直接的に取り組んでいるわけではないが、様々な国のメンバーが、自分たち自身で、またJAFSと協働で、環境活動や地域開発に携わってきた。

気候変動をテーマとする今回の国際ネットワークセミナーの、事前アンケートに対するAFSメンバーの回答を以下にまとめる。参加12か国のうち5か国から回答を得た。

(AFS国際調整オフィス ジーナ・ヤップ、翻訳：JAFSスタッフ 川本裕子)

1. あなたの団体は気候変動に取り組んでいますか？

はい：RUDYA（インド）、AFSナグプール（インド）、AFSネパール、カリピ（フィリピン）、AFSソルソゴン（フィリピン）、AFSシンガポール

いいえ：SPARSH（インド）、KAFS（カンボジア）

2. 支援対象者に対して、気候変動に関する意識啓発をしたことがありますか？

RUDYA（インド）：グリーンスカウト運動を通して啓発

SPARSH（インド）：土壌浸食の防止や植林などの環境活動に関連して啓発

AFSナグプール（インド）：都市部と農村部の両方で、気候変動に関する啓発プログラム（ストップ地球温暖化、環境デー、植林プログラムなど）を実施している。他にも気候変動に関して、地域で啓発パンフレットを配布したり、ソーシャルメディアに投稿したり、SNSでイベント参加を促したり、会合を催したり、地域活動を組織したりしている。

AFSネパール：川の土手を急速な土壌浸食から護り、耕地の流出を防ぐため、小規模ダムを建設した。川が増水する夏に地域が直面するリスクに関して、注意喚起もできた。

カリピ（フィリピン）：浸食を受け荒廃した丘陵や山、川の土手などに竹を植える。これは地球の再緑化や自然再生につながるとともに、竹は村人にとって無料の建築資材ともなり副収入源ともなる。主目的は川の土手の土壌流出を防ぐこと、そして気候変動による環境破壊を緩和することである。竹は二酸化炭素吸収にも役だつ。

AFSソルソゴン（フィリピン）：マングローブを植林し、子どもたちに環境やごみ管理について教える。

KAFS（カンボジア）：毎年植林しており、植える前にはいつも、木と気候変動との関係について説明する。

3. 地域の貧困層はどのような気候変動に直面していますか？

インド：世界銀行の研究によると、気候変動は、インド経済の成長可能性にとって最大の脅威の一つとなりつつあるようだ。気候変動に伴う健康影響や農作物の収穫量減少、国民の生活水準低下などがある。降水量が減少し干ばつが起こる。夏には48～50℃まで気温が上がり、村の井戸の水位は日々下がり、湖や川は干上がる。気候変動は、環境や政治・経済・社会に複合的な負荷を与える。耐え難い熱波、厳冬、豪雨などいかなる形であれ、気候変動は環境の脅威となり、水資源を枯渇させ、食糧生産が制限される。生活を破綻させ家族を引き離し、人々を貧困に陥れる。直接の影響は気温上昇であり、病気や死亡の増加と関わる。また洪水や土砂崩れ、暴風雨などの激しい自然災害により、死傷者が増える。

ネパール：貧困と教育不足により、気候変動がいつそう大きな災害をもたらす。

フィリピン：我々の活動の受益者は大部分が農民である。彼らの多くは、雨季には激しい洪水、夏には極度の高温に直面している。2つが重なって作物がダメージを受け、また洪水は家を破壊する。農民は気付いていないが、気候変動の最も恐ろしい影響は、熱波の身体的影響であり、多くの人々が犠牲となる。極端な暑さ（エルニーニョ）や極端な降水（ラニーニャ）、スーパー台風を経験している。

シンガポール：気候変動により野菜や果物の収穫が減り、物価が上昇した。

カンボジア：洪水や干ばつが増える。これは経済的損失を生み、人々はますます貧しくなる。

4. 支援対象者は気候変動に対してどんな適応策をとっていますか？その策はどんな効果がありますか？

RUDYA（インド）：支援対象者に対して気候変動に関する様々な啓発キャンペーン・セミナーを開催している。村近くの小さい川にセメントの堰を作って、雨水の流れをせき止めた。村の湖を掘って貯水量を大きくし、様々な村で村人も積極的に参加して木を植えた。村の清掃活

動を実施し、化学肥料や農薬の影響について啓発をして有機肥料の使用を促した。

SPARSH（インド）：地域社会の声を聴いて、災害に備える、地域の自治組織と長期計画策定、ソーシャルメディアの利用、持続可能な農業に関する情報共有

AFSナグプール（インド）：現代技術と、地域の生態系に関する伝統知、その2つの良いところを融合したい。

AFSネパール：JAFSの支援により、水害へのささやかな抵抗として小規模ダムを造ったところ、洪水が起こった際に素晴らしい力を発揮し、土壌流出や堤防決壊がかなり軽減された。これまで夏の洪水に耕地を洗い流されてきた農民の役に立った。

フィリピン：川の土手への竹の植林により土壌流出を軽減、マングローブ植林

AFSシンガポール：野菜や果物の価格上昇を抑えるため新たな供給源を開拓、気候変動に関する情報共有や会合

KAFS（カンボジア）：気候変動リスクについて地域で教育し、災害時の被災を避けるために必要な物の準備を促す。例えば、洪水や干ばつ後に再び作物を育てるために種を全て保管しておかなければならない。

5. 気候変動に関して支援対象者たちと取り組みをまだ始めていないとすれば、いつ始める計画ですか？

RUDYA（インド）：JAFSの支援で飲料水事業に取り組んでいる。支援対象者はほとんどが農民なので、支援地で灌漑施設の造成を計画している。灌漑施設は彼らの発展のために必須である。学校や自治体のための特別な啓発プログラムの作成、気候が影響を与える農民のための調査実施や支援センター創設と相談事業を計画している。加えてグリーンスカウト運動と飲料水事業を、より遠方の地域まで拡げる。

SPARSH（インド）：次のような気候変動適応策をとる予定 1) 地域社会の声を聴く、2) 災害に備える、3) 地域の自治組織と長期計画策定、4) ソーシャルメディアの利用、5) 持続可能な農業に関する情報共有

AFSナグプール（インド）：避難所での救援物資や食糧の提供と健康管理

カリピ（フィリピン）：竹と暮らしのプロジェクトを継続、ごみ問題に取り組む

AFSソルソゴン（フィリピン）：植林とごみ処理（4R推進—リデュース・リユース・リサイクル・ロット [堆肥化]）についての教育継続

KAFS（カンボジア）：能力は限られているが、植林による緑化推進、プラスチック袋を使わない環境美化、作物や家畜など農産物に有機農法推奨、など活動をもっと増やすことができる。

救援活動を手伝ってくれました。この活動を通じてボランティア活動の大切さを身をもって感じました。日本からの支援で300世帯にソーラー式のランタンを配ることができました。新しい船も寄贈され、ありがたかったですね。

ハイエンの救援活動の体験をもとに、学校で児童たちに台風や地震の怖さ、避難方法、環境保全の大切さを教えています。植林も進めています。今度のセミナーでは気候変動の影響や自然災害に取り組み皆さんの活動を知り、大いに勇気づけられました。

洪水や土壌浸食 防ぐ堤防づくり

パダム・シユレスタさん

AFSネパール（ネパール）

ネパールの平野部では、毎年の洪水によって、家屋への浸水のみならず、農地も被害に遭い、食糧難につながっています。

ピトウリ村はJAFSとともに2000年から植林を始め、木がなかった地に森をつくることに成功しまし



たが、近年、洪水によってその森の縁が浸食されて土地がけずられ、森への影響を懸念していました。

その状況を見た日本人の方が、日本の古い技術を生かせると言って、知恵を伝授してくれることになりました。竹と土という現地にある材料と、大型

ビニールシート、鉄杭を組み合わせてつくる低堤防を、5年前から3年かけて設置しました。その上に植樹して、土を固定しました。

作業には重機やセメントを用いませぬ。理由は、国立公園に隣接する土地のため、野生動物の侵入を妨げることがないのが前提だからです。

現在、浸食を防ぐだけでなく、土が溜まって土地が回復してきました。言うまでもなく、近隣の村が洪水を受けている時でも浸水することがあります。そして自然公園の一部として、サイ見物の名所にもなりつつあります。自然との共存が成り立ち始めています。

ボランティア高校生に尊敬と羨望 子どもに「教える」難しさ思い知る



小学生に算数を教える筆者（右の黒いTシャツの男性）
|| ネパール、チュニケル村

つてアジア協会アジア友の会と出会い
ました。
4月頃から国内研修を始めました。
NGOのNの字すら知らない僕にとつ
て、全ての情報が新鮮で非常に興味深
いものでした。

そして、大学の夏休みを利用してネ
パールに行きました。様々な衝撃があ
りました。決して少なくない交通量の
道路を、横断歩道もなしに平然と横切
る人々。歩道には多くのゴミが捨てら
れており、呼吸すら躊躇してしまうほ
ど空気が汚れている。こんなにも違
うのか。実は初の海外だったこともあ
り、驚きはひとしおでした。

ネパールには50日間滞在したのです
が、始めと終わりの1週間は、首都カ
トマンズから車で5〜6時間程度のと
ころにあるボテシパ村という山村で、
ワークキャンプをしました。初めの1
週間は、村の学校の子どもたちと一緒
に植林活動をしました。自分の村を良
くするために自分の手で未来を作つて
いく姿に、僕も見習わなければならな
いと感じました。

終わりの1週間は京都暁星高校の方
たちと、水道パイプライン建設をし
ました。水道と聞いて、大きくて固いも
のと想像していたのが、実際はホース
のような大きさの直径で、それでも土
の中に埋めるのは重労働でした。一緒
に活動した高校生たちを見て、高校生
のときから海外にボランティアに来よ
うと決心しました。

うと考える彼らの姿勢と行動力に、尊
敬と羨望の眼差しを向けずにはいられ
ませんでした。

ワークキャンプがない間はチュニケ
ルという村の学校で、算数を教えてい
ました。「何もできなかった」。それ
がこの村での感想です。

子どもたちと仲良くなる。九九や計
算問題を理解してもらおう。そういつた
ことは比較的簡単です。しかし、分か
りやすく解説するためには図やジェス
チャーだけでは限界があること。さら
に、同じ学年でも学力に大きな差があ
り、授業の難易度を調整するのが難し
いこと。これらを解決することが、今
の自分では不可能だと知りました。

たくさんこのことを経験させてもらえ
た中で、僕が得たことがあります。人
と人とのつながりの大切さです。

「人という字は…」の意味をこの年
になってやっと実感できたことが、笑
われるかもしれないですが、僕の宝物
です。

人間関係が希薄になってきているこ
の世の中でこれほど価値のあるものに
気付かせてくださったJAFSやネパ
ールの方々に恩をお返しできるよう
、自分に何ができるかを考え続けてい
たいと思います。さらに、こういった
活動に興味があっても、なかなか一歩
を踏み出せないでいる若い人たちの
橋渡しになれるように、尽力してい
たらなと考えています。

理系大学生のネパール初研修記

JAFS会員 溝口竜太郎

僕は、大阪工業大学工学部電子情報
通信工学科に在籍しています。何の面
白みもなく、ただ人生を消化してい
ただけの理系学生にとって、NGOやボ
ランティア活動などは、関わりのない
ものでした。僕は、将来やりたいこと

も、生きる意味すらも、見つけれられ
ていません。

しかし、あるとき不意に、人生は一
度きりしかないということを意識する
ようになったのです。人生を変えた
い。何かをしたい。そんなときに縁あ

京都暁星高等学校の生徒10名と教師2名が9月18〜25日、ネパール地震の
復興支援地シンドウパルチョーク郡インドラワティ村（旧ボテシパ村）であ
ったスタディーツアーに参加し、現地の村人、カトマンズのボランティア大
学生とともに水道パイプラインの設置作業をしました。雨が長引いて道がぬ
かるみ、村に到着するまでも苦労が多かった中で、全員が大きな宝を得て、
元気に活動を終わりました。うち2名が将来、国際協力に携わりたいという夢
を持ちました。そんな高校生の目から見たネパールの現在を紹介します。

ネパールで水道 ワークキャンプ

2年 稲岡健

京都暁星高校

パイプラインのワークは、宿泊して
いたアジア協会のベースから、車で1
時間ほどの場所にあった。みんなでト
ラックの荷台に乗り込み、ワーク地
に向かった。雨季が終わって間もないた
め、本当に道が悪かった。毎年乾季に
なると道を平らにならすらしいが、ま
た雨季が来ると、この状態に戻ってし
まうという。移動の面でもかなりの不
自由があることを実感した。

ワーク地に着き、作業を始めた。思
っていたよりも気温が高く、炎天下で
の作業になった。土の質は日本と全く
違い、幾重にも重なった層に、大きな
石がゴロゴロと埋まっていた。はがす
ように掘り進めるのは本当に大変だつ
た。現地の方々は、男性だけでなく女
性も道具を手に取り、僕たちが休憩し
ている間もずっと作業を続けていた。

すべての子に学びの機会を…願い

村の学校で日本のポップミュージックとダンスを披露||ボテシパ村スリ
ーチャンドソリ小中高等学校



現地の方の体力に驚かされた。自分の
力不足も強く感じた。
水源から3カ所の水場まで水を引く
ことができた。蛇口から流れる水を見
て、生徒、先生たちとJAFSの皆さ
ん、村の方々、全員の力でこれだけの
仕事ができただと感動した。日本で
は全く意識することのない水の重要性
について、考えさせられた体験でもあ
った。ボテシパ村滞在中、シャワーの
水が出ないということがあって、水の
大切さを体で学んだ。
ネパールの大学生から聞いたところ
によると、公立学校の教育を無料で受
けられることになつてはいるが、実際
は学校に通えない子どもたちが非常に多い
ということだ。
教科書代や制服代に加え、学校の補
修工事費、課外活動費、テスト受験料
など高額な学費を支払う必要があるか
らだという。教育環境が整備、改善さ
れてネパールの子どもたち全員に一日
も早く、学びの機会が与えられること
を祈る。そのために、一体自分は何を
すべきか、何ができるのか、を考えず
にはいられなかった。
日本も、教育の形を一例として教え
ることが必要だと考えた。本当に教育
を無償化するには、税金のシステムを
整備する必要がある。これから国づく
りをするネパールに、そのヒントを与
えることが、先進国に求められている
と思う。

ロヒンギャ難民に 支援物資を手渡し

マレーシアで開かれたアジア国際ネ
ットワークセミナーに日本から参加し
た13人は10月8日、ミャンマーからマ
レーシアに逃れてペナンで暮らすイス
ラム系少数民族ロヒンギャ難民を訪問
し、会員の皆さんから寄せられた募
金で購入したお米、ビスケット、サラ
ダ油、タオルなどの支援物資を1家族
に贈った。幼児には風船を渡した。
JAFSは本誌2018年夏号で、
マレーシアに逃れたロヒンギャ難民の
窮状を紹介。ブキムルルジャム地区
に住む難民の救済・支援募金を呼びか
け、約45万円が寄せられた。

難民は同地区の古びたアパートに住
んでいる。その一人、5カ月の赤ちゃん
を抱いたラシダさん（21）はミャン
マーで5年前に家を焼かれ、着の身着
のまま、父と母、弟の一家4人で船で
マレーシアに着いた。船に乗った避難
民は約500人。途中、高波で海に落
ちたり、病気で亡くなった人もいる。
2年前に結婚。同じ避難民の夫（27）
は建設現場で働いている。将来のこと
を聞くと、こんな答えが返ってきた。
「ここは安全です。故郷には帰りたく
ありません」

（JAFS広報企画委員長
法花敏郎）

JAFS設立 40周年を前に

2019年10月にJAFSは設立40周年を迎えます。これを機に、今のアジアが抱える課題と本会の取組みについて、4回シリーズでお知らせします。

日本も水大国ではない

JAFSが事務所を設けている大阪では、2025年の万国博覧会開催が決まったことで、経済発展を喜ぶ声が多く聞かれます。大阪は水の都とも呼ばれ、年間降水量が1279mm。日本の平均年間降水量は1700mmで、世界の陸域の平均年間降水量約810mmの約2倍の水が、日本列島を潤しています（国土交通省のデータより）。私たち「水」はあって当たり前であると考えているのが日常です。

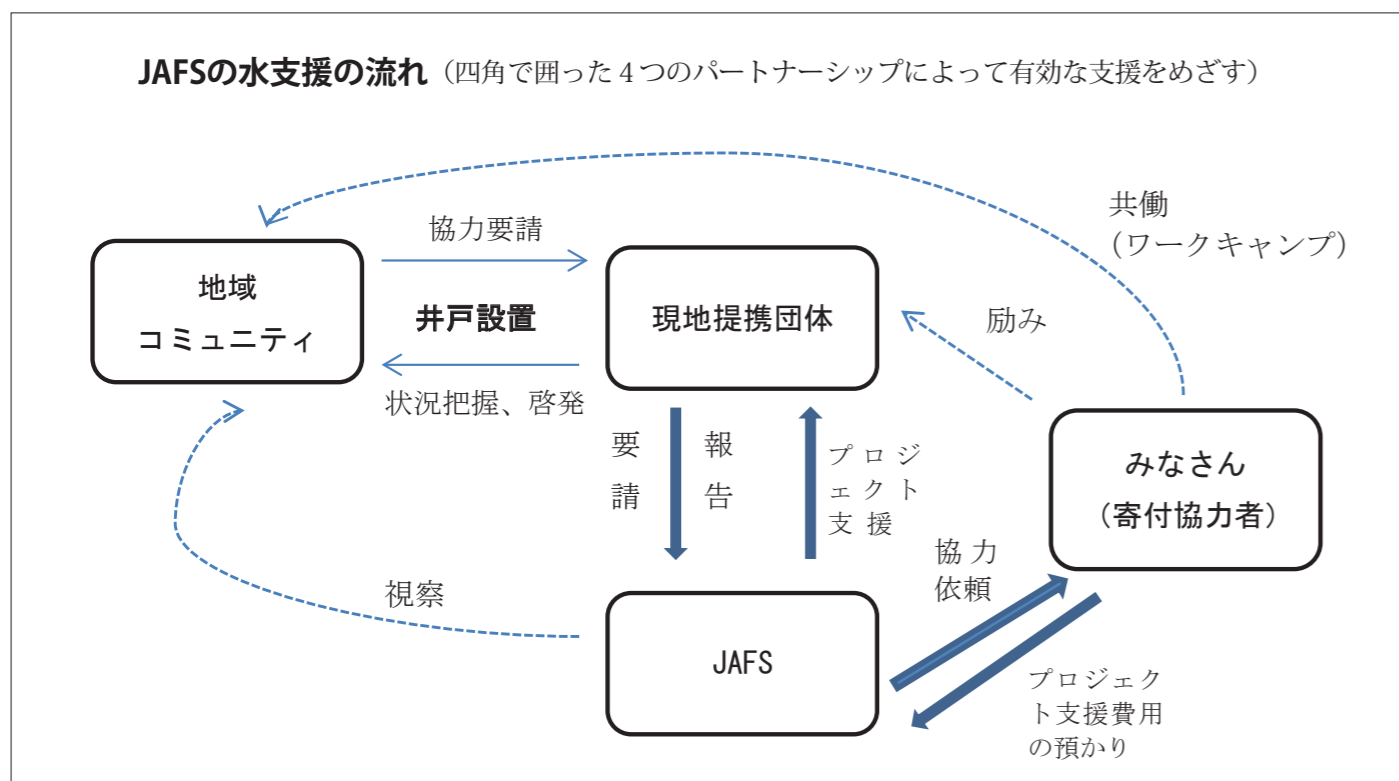
そんな日本も実は、自国で必要な水を国内で全て供給できていないことをご存知でしょうか。なぜかと言うと、私たちの食生活が密接に関係しています。日本の食料自給率はわずか4割で、6割を外国に依存しています。その食料を作っている国の水によって食べ物を得ている訳です。こういった状

三十数年前、二十数年前に設置した井戸の役割が終わったと報告が来ることもあります。インフラが整って水道ができたのです。それは発展に必要なことで、私たちの支援が生かされ、水道が設置された好ましい結果です。

ここで、一つの村の移り変わりの具体例を紹介します。私が1991年に入ったネパールのP村。当時、井戸は数えるほどしかなく、川の水を常用していました。幸いに、私がホームステイした地域には井戸があり、そこで毎朝バケツを持ち水をくみ上げて洗面することから一日が始まり、水くみに来るお母さん方との井戸端会議から、人々の状況などを理解していきました。今でも忘れられないお母さんたちからの教えは、乾季に井戸の水量を維持し、飲み水を確保するため、「水浴びと洗濯は川へ行って！」と何も知らない私に厳しい言葉をかけてくれたことです。水源の水量を知る人の知恵があり、季節によって井戸水の使い方をコントロールしていたのです。

しかし生活用水の70%以上を依存していたその川が、近くに建設会社があった2005年から干上がってしまいました。水を確保するために井戸を増やした結果、これまで使っていた井戸が枯れてしまい使えなくなった、という声があちらこちらで聞こえ始めました。村の人たちが守って来た地下水量のバランスが崩れ始めたのです。現在は以

「誰も取り残さない」村と都市めざし



環境変動・枯渇と戦う



乾季には井戸の水を節約するため、干上がりかけた川で食器を洗うネパールの女性たち。スダール村

① 水支援は今…

況を差し引きすると、日本に住む私たちは、水についてもっと真剣に考えることが必要なのではないでしょうか。アジアが変革していく中での「水」の今を考えていきたいと思います。

限りある資源を守る知恵を

JAFSは39年にわたって水を贈る運動をしてきました。アジア各地の現地提携団体より届く井戸の要請に対し、支援しています。現地提携団体はコミュニティが井戸を維持管理できるよう啓発します。みなさんの支援はその提携団体を通じてコミュニティに届きます。資金と同時に日本との関わりが現地の大きな励みとなり、コミュニティの次なる一歩につながるのです。現地の様子を肌で感じたい方は、ワークキャンプで実際に井戸の建設に共働参加できます。（次ページの図参照）

近年、南アジアから、緊急に飲料水がほしいという依頼がたびたび来るようになりました。理由は、水源の枯渇です。気候変動で雨が全く降らないためや災害によって枯渇したということ。水道インフラが整っておらず、近くの水源を利用する生活を送っていたが、そのバランスが崩れ、生活に必要な水量を確保できなくなった、という事情が背景にあるようです。アジアが発展する中でも、このように自然の水資源のみに依存している地域がまだ数多くあるのが現実です。

前より20歳、30歳深く掘ることで水を確保しています。

ゴールは貧困からの脱出

経済的に価値がないとみなされる地域には、水インフラ設備のために国家予算は投じられず、水を有効に貯める設備を持たない辺境地が多いアジアでは、同じようなことがまさしくあちらこちらで起きています。そして、経済が発展すると村から都市および都市近郊に人が集まり、都市生活でも水の問題が発生しています。スラムの居住環境もその一例です。このように現在、多種多様な「水」の状況があります。

近年、世界で国際社会が解決すべき課題17項目の目標に掲げられたSDGs。「誰も取り残さない」をめざしています。その意味は真なる貧困の撲滅です。17項目のうち目標6が「安全な水とトイレを世界中に」です。

私たちJAFSはこれまでも「取り残された人たち」に目を向けた活動をしてきました。「水」支援を通して命の水である飲料水供給を実施することが、アジアの人々を力づけ、そして自分たちの暮らしを持続可能にするために自立して行動し、貧困から抜け出せる人々を輩出することにつなげていくこと。それがJAFSが今後も「水支援」を実施していくうえで重要視すべきゴールではないでしょうか。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

2019年1月《第1期》新設開学 JAFS アジア市民大学

一味違うアジアを一緒に探求しませんか！

- 開催日程： 2019年1月 ~ 12月
(原則として毎月第2土曜日 14:00-16:00)
- 会場： 肥後橋官報ビル 8階会議室
(大阪メトロ肥後橋駅より徒歩3分)

●● JAFSアジア市民大学の特長 ●●

- ★ アジアを熟知した第一線の教授陣による一流の講義！
- ★ 生の体験・人生談満載の魅力溢れる講義内容！
- ★ 座学だけでなく、受講生との相互交流の時間もたっぷり！

○主催：公益社団法人アジア協会アジア友の会

	開講日	焦点国	テーマ	講師 (敬称略)
1	1月12日	アジア総論	大戦後のアジア経済の潮流	西澤 信善
2	2月9日	中国	中国を視る - 都市 -	石原 潤
3	3月9日	ミャンマー	アジアの潮流～ミャンマー経済の変貌～	西澤 信善
4	4月13日	インド	インドの政治世界における宗教とカースト	清水 学
5	5月11日	中国	中国を視る - 農村 -	石原 潤
6	6月8日	インド	インドの経済成長と都市・農村の変動	岡橋 秀典
7	7月13日	インド	インドヒマラヤの山岳農村の変容と持続可能性	岡橋 秀典
8	8月31日*	バングラデシュ	バングラデシュの政治の今	佐野 光彦
9	9月14日	バングラデシュ	離陸するバングラデシュ - 30年の見聞と実践から	野間 晴雄
10	10月12日	マレーシア	マレーシアの人口政策と教育	平戸 幹夫
11	11月9日	韓国	朝鮮時代の地図に描かれた日本	山田 正浩
12	12月14日	アジア総論	アジアの過去と未来・光と影-アジア市民大学開学一年の展望	實 清隆

【受講資格】 アジアに興味のある方、当会活動に興味にある方はどなたでも受講できます。受講希望者のご要望に応じて、1年間通じて受講、興味のある月のみの受講も可能です。

【お問い合わせ・受講お申込】

下記まで電話またはE-mail、FAXのいずれかでご連絡いただければ、折り返し詳しいご案内書とお申込書を郵送いたしますので、ご検討のうえ、お手続きいただければ幸いです。
*公益社団法人アジア協会アジア友の会 法人賛助会 JAFS アジア市民大学事務局 担当：柿島
〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階
TEL:06-6444-0587 FAX:06-6444-0581 E-mail:kakishima@jafs.or.jp

【受講料】

入学金は無料です。受講料のみお支払いいただきます。年間受講は一括手払いのほか、半期支払い(上期1~6月分、下期7~12月分)ができます。

年間受講	区分		受講料
	一般		24,000円
	学生(大学・大学院)		10,000円
		JAFS会員	20,000円

月単位受講	区分		受講料
	一般		2,400円/月
	学生(大学・大学院)		1,000円/月
		JAFS会員	2,000円/月

Report of ASI, in Philippians

Apana Dhamgaye

AFS-Wadi, Nagpur, India

Greet to you all. First of all I really want to thank you for this wonderful and unforgettable opportunity you have given me. I count this is the great thing and great privileged for me because I Born in very poor family and grown up in Hostel as an Orphan. Really I don't have words to express my gratitude for your given opportunity, love and sponsorship. I really want to thank Mr. Pramod Thorat who has recommended, encouraged and help me for this course.

In ASI I learned many important things about I was unaware. Like; what is community? It's role, goals setting, understanding the community from a Socio-cultural perspective, Human relations Training, Sociology and spirituality of communication. Basic principles of CO and CD, Participatory Action Research, Project planning Management, Management Training, Disaster Risk Reduction Management and knowledge. We had community exposure in Island among poor people. It was also great experience. Because first time I met and lived with Athis kind of people and I experienced their condition.

In ASI I had very good experience. I can experienced a very good and spiritual atmosphere. ASI' education is focused on transformative praxis towards justice, peace and value for the integrity of creation and mission of committing to become humane, liberating and creative is compelling. This is the kind of education most appropriate for the today's world and society.

It keeps me in constant focus in witnessing and experiencing the philosophy of commitment for total human development.

Sir, I want to promise you that whatever I studied in ASI, I will put it in practice in my community and try to find out the problems and difficulties and it's solution. I will surrender myself for society goodness. With this I may say I will fulfill my vision and mission. In effect of caring for the people who are oppressed and rejected.

まず最初に皆さんがこの素晴らしい、忘れられない機会を私に与えてくださったことに感謝申し上げます。私はインドのとても貧しい家庭で生まれ、孤児院の寮で育ちました。そんな私にとって、皆さんの愛と奨学金によってASI(アジア社会科学学院)の地域開発コースに参加できたことは本当に素晴らしいことであり、感謝の気持ちには言い表せられないほどです。私を励まし、コースに参加できるように助けてくれたプラモッド・ソラット氏(HDSI代表)にも御礼申し上げます。

した。例えば「コミュニティとは何ですか?」それは、社会的文化的観点からの社会の理解、人間関係、訓練、社会学、コミュニケーションの精神性の役割、目標設定、コミュニティの理解です。コミュニティ・オーガナイズとコミュニティ・デベロップメント(地域の組織化と開発)の基本原則、参加



ASIでは、私が気づいていなかった多くの重要なことを学びました。

型行動研究、プロジェクト計画管理、管理訓練、災害リスク軽減管理と知識などです。実際に貧しい島のコミュニティに入り、彼らと同じ生活をしましたが、それは素晴らしい体験でした。ASIでは他にも、とても良い精神的な雰囲気を経験することができました。ASIの教育は、正義、平和、創造の完全性と人道的なものになることを約束する価値、そして創造性が魅力的であることに向けた変革的な実践に焦点を当てています。これは、今日の世界と社会にとって最も適切な教育のひとつです。またそれは、人類全体の

発達のための同意を得るための哲学を目的の当たりにして経験することに常に焦点をあてています。私はASIで学んだことは何でも、私のインドの地域社会で実践し、問題や困難に出会っても努力して解決していくことを約束したいと思います。私は社会のために自分自身を役立てていきたいと願っています。これは私のビジョンと使命を果たすことと言えるでしょう。社会から抑圧されたり拒絶されたりする人々の状況を変えていきたいのです。(翻訳: JAFSスタッフ 岡本佳子)

フィリピン アジア社会科学学院の奨学生支援

アパナ・ダムゲイ
AFSワディ(インド)

……海外からの報告……和文と英文でお伝えします

毎日笑顔で水をくめます

村の大半が仏教を信仰する少数民族です。女性は差別され、意見や希望を言えなかったのですが、HDSI (JAFSの現地提携団体)の永年の活動によって意見が通るようになり、寄贈井戸が実現しました。農業や畜産で生計を立てていますが、現金収入が少なく、季節労働者として都市部に出稼ぎに出ます。以前は2kmも離れた井戸へ水くみに行き、水場は混雑して口論になったりしていました。井戸によって争いがなくなり、毎日笑顔で水をくめるようになりました。



【寄贈者】林 康子 様

マハラシュトラ州アムラワティ県サヴァリ村
 受益者：197名(43世帯)
 井戸形式：ポンプ式(深さ140m)

【寄贈者】NITTOグループ様

パイプライン復活で生活一変



南部州ハンバントタ県カツワナ地区ワッカダ村
 受益者：75名(25世帯)と小学生450名/井戸形式：水道パイプライン

紅茶栽培や日雇い労働で暮らしています。経済的に苦しいので開発が著しい湾岸部へ出稼ぎに出て、村の働き手が少なくなっています。昔、山のわき水から3kmの水道パイプラインがありましたが、壊れて使えなくなりました。SARVODAYA (JAFSの現地提携団体)が村人と相談して修理拡張し、多くの人々が恩恵を受けられるようになりました。今まで遠くまで水くみに行っていたのですが、近くで衛生的な水を汲めるようになり、生活が一変しました。心より感謝申し上げます。

地震後の暮らしを建て直すきっかけ

【寄贈者】釜下良次郎様

マジ地区といわれ3世帯のみが離れて住んでいます。"マジ"とは川の漁師の意味で、近くの他の民族と離れて谷で生活をしています。住んでいた家は地震で倒壊し、最近ようやく2部屋だけの家の再建に着手しました。これまで谷を上り下りし毎日片道30分かけて水をくまなければなりませんでした。ようやく家のそばで水をくめるようになり安堵感一杯で喜んでいます。家の再建と井戸を得て、暮らしの全てを建てなおせるきっかけになりました。心より感謝申し上げます。



シンドウパルチョーク郡インドラワティ村
 受益者：15名(3世帯)
 井戸形式：水道パイプライン

ご寄付には
 税の優遇措置が
 受けられます

なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■ (2018年4月現在)

インド=60万円 フィリピン=33万円
 カンボジア=28万円 スリランカ=22万円
 ネパール=17万円 (パイプライン=25~150万円)
 バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会
 ・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会
 ☎06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで
 井戸ができた村

病気の心配から解放された

【寄贈者】JAFS西宮ぞうすいの会様

主産業は農業ですが鶏豚の飼育、パーム砂糖づくりなどの副業に励んでいます。寄贈井戸ができるまでは動物も入り込む、ため池の水を生活用に使っていました。トイレも15%の家には少なく、衛生に無関心でした。かぜ、発熱、下痢になると地域の病院にかかっています。収入の低い住民にとって病気は経済的には家計を圧迫し、心配の種です。寄贈井戸によって精神的、経済的に解放され、健康な生活を送れるようになりました。心より感謝しています。



タケオ州トレアン郡ロネアム地区トメイ村
 受益者：57名(11世帯) / 井戸形式：露天式(深さ21m)

【寄贈者】日本キリスト教団松山教会様

衛生観念が向上しました



タケオ州トレアン郡ロネアム地区トメイ村
 受益者：41名(8世帯) / 井戸形式：露天式(深さ20m)

主な産業は農業ですが、副業として鶏・豚の飼育とパーム砂糖づくりをしています。学齢期の子どもは全員学校へ行っています。これまでは、ため池の水を煮沸して飲み水、生活用水に使用していました。家庭へのトイレの普及率は15%で、衛生意識は高くはありません。低収入の家庭にとって、病気は精神的にも経済的にも大きな打撃となります。寄贈井戸によって衛生観念が向上し、健全な生活を送ることができます。

カバナトゥアン市パンガティアン村
受益者：70名（15世帯）／井戸形式：ポンプ式（深さ25m）



カバナトゥアン市パンガティアン村
受益者：70名（15世帯）／井戸形式：ポンプ式（深さ25m）



ガバルドン町バントウグ村
受益者：120名（20世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ30m）



ハエン町インブニア村
受益者：60名（10世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ36m）



カピアオ町サンフェルナンド北部村
受益者：50名（10世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ36m）
カピアオ町ナチビダード北部村
受益者：60名（10世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ36m）



カピアオ町シカット村
受益者：80名
井戸形式：ポンプ式（深さ36m）



カピアオ町シニピット村
受益者：60名（15世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ36m）

**仕事ができ、生活一変
病気の不安からも解放**

多島国フィリピン。海の近くでは塩分の混入を防ぐために30m以上の深井戸を掘る必要があり、資金と時間がかかります。京セラ労働組合様はこれまで、100基を超す井戸をご寄贈くださいました。ヌエバエシハ州の11カ所から寄せられた感謝の言葉を紹介します。

「マニラや海外まで出稼ぎに行く生活が一変します」ハエン町インブニア村

「古い井戸は汚水が流入し、いつも混んでいます。清潔な水を時間をかけずにくめます」ガバルドン町バントウグ村

「多くの世帯が同じ家に住む生活。子どもや女性が重労働の水くみから解放されます」サンタローザ町ソレダット村

【寄贈者】京セラ労働組合様



サンタローザ町サブサブ村
受益者：90名（20世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ30m）



サンタローザ町ブルゴス村
受益者：115名（20世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ30m）



サンタローザ町ソレダット村
受益者：70名（15世帯）
井戸形式：ポンプ式（深さ30m）



国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJA F Sへ裏表紙にアドレス、連絡先

アジアと一緒に…民族衣装で勢ぞろい



第3回アジアンチャリティ・フェスティバルが11月24日、大阪市西区の立正佼成会大阪普門館4階ホールで開催されました。「アジアの人たちと一緒に、アジアの食とエンターテイメントを楽しもう！」をテーマに、立正佼成

会が主催し、アジアの食とエンターテイメントを楽しむ！」をテーマに、立正佼成

会様のご協力のもと、アジア各国の舞踊や、音楽など約30プログラムが披露されました。雅やかな音楽演奏によるオープニングの後、様々な楽器による演奏が、時には軽やかに、また激しく行われました。とりわけ、アジア各国からの留学生たちによる盛り上がりは前回同様で、各プログラムに積極的に参加してくれ、写真、大いに楽しんでもらえた様子でした。今回は、民族衣装ショーが初めてプログラムに加わりました。来場者とアジア各国からの留学生たちが華やかな民族衣装を身にまとい、ステージに登場し、所せましと披露してくれました。会場からも大きな拍手と歓声がわき起こっていました。フード・グッズブースには、約30店が出店し、魅力あるアジア雑貨品や日用品、食材などを並べていただきました。



大阪府大東市のJR住道駅前前で10月20日、恒例のチャリティーバザールを

開催しました。当日は早朝から、あいにくの雨。少し不安もありましたが、やる気満々で臨みました。出店する「おでん」「焼きそば」「チヂミ」「肉うどん」「ケーキとコーヒー」…。そして販売するために皆さんがご厚意で寄せてくれた品々。この日のために一生懸命に準備したのですから。風が強かったものの、間もなく雨が上がり、ほのぼのとした雰囲気の中でイベントが始まりました。今年は昨年にも増して、たくさんのグループパフォーマンズも見られました。写真。私も、歌声の一員として出演させてもらいました。見学のお客さまと一緒に口ずさみ、ともに楽しい時間を過ごさせていただききました。一日を振り返り、温かいお客さまに感謝するとともに、強風の中で無事に終えられたことをうれしく思いました。(アイビー歌声サロン 有山加代子)



2018年度地区世話人・活動協力スタッフ研修会「明日のJA F Sの仲間を一緒に作りませんか」を9月29日に開いた。会場は、台風21号の爪痕が残る堺市・浜寺公園内にある大阪国際ユースホテル。再び大型台風が接近するさなかでの開催となった。元棋士という異色の経歴を持つ経営者で、PHP友の会の要職にある高木孝一さん、写真前列右が講師。同会は月刊誌『PHP』の読者が中心となり、勉強会、交流会、社会貢献活動をする団体で、新規会員の獲得で悩みを持つところなどがJA F Sと似ている。高木さんは、同会の新規会員数を1年で3倍に増やした実績を持つ

河内長野に友の輪広め1周年



河内長野アジア友の会は、2018年1月20日に発足しました。本部や会員、スタッフの皆さまに支えられ、白

要であり、一方、触発された会員は、自ら進んで活動を進めるのです。要点が整理された高木さんのレジュメと体験談は分かりやすく、講演者の人選や告知の方法など、新規会員獲得の具体的な施策は、役立つ話が多かったです。そして、会員組織の維持・発展に関する、本質的で重要な事が語られていた。新規会員獲得だけでなく、会員組織として正しい課題に、改めて気付かせてくれた。(JA F S会員 新井和彦)

井春夫会長の元、月例会を第4月曜日に開き、11月で11回目を迎えました。毎月ゲストスピーカーを迎え、卓話の後、質問形式で交流を深めています。最初は本部からアジアの留学生や、在留アジアの方をご紹介いただきました。これを参考に、まずは白井会長の保護司の話、そして私のインド舞踊の魅力、それ以降は河内長野在住の著名人の方々に卓話をしてもらい、同時にアジア友の会の活動や趣旨を、参加者に伝えてきました。微力なため、なかなかアジア友の会に入会して頂けないですが、河内長野に私たちの活動を根付かせ、アジア友の会を一人でも多くの方に知ってもらえるよう邁進したいと思っています。(河内長野アジア友の会事務局長 新谷百代)

た。アジア各国のフード販売店は「似ているようでどこか違う」お国自慢の味付け。お酒もお話もどんどん進む方々が続出で、飲んで食べて交流を深め、そして笑顔がいっぱいでした。グローバル化の波の中で、多くのアジア諸国を含む外国の人々が、私たちの身近に住んでいます。このチャリテ

イ・フェスティバルに参加して出会った皆さんのご縁を、もっと世界へ広げてもらえるように、そして、多文化共生をますます育んでゆけるように、社会や世界の問題をとらえ、ともに歩んで行きたいと望んでいます。(フェスティバル実行委員長 マホムッド・ジャケル、出口貴之)

雨ニモ負ケズ…チャリティーバザール

開催しました。当日は早朝から、あいにくの雨。少し不安もありましたが、やる気満々で臨みました。出店する「おでん」「焼きそば」「チヂミ」「肉うどん」「ケーキとコーヒー」…。そして販売するために皆さんがご厚意で寄せてくれた品々。この日のために一生懸命に準備したのですから。風が強かったものの、間もなく雨が上がり、ほのぼのとした雰囲気の中でイベントが始まりました。今年は昨年にも増して、たくさんのグループパフォーマンズも見られました。写真。私も、歌声の一員として出演させてもらいました。見学のお客さまと一緒に口ずさみ、ともに楽しい時間を過ごさせていただききました。一日を振り返り、温かいお客さまに感謝するとともに、強風の中で無事に終えられたことをうれしく思いました。(アイビー歌声サロン 有山加代子)

森のサロンで デュオ・ コンサート

これで井戸基贈れるかな?

J A F S 高槻では秋も深まってきた11月11日、大阪府高槻市の摂津峡にある芸術サロン「摂津響Sal」で、クラリネット&アコーディオンとピアノのデュオからなるアコースティック・コンサートを開きました。次ページの写真。

J A F S 高槻ではこれまでに、隠れキリシタン歴史ウォークや蜚観賞会、ネパール料理店でのアジアン・ホームパーティなどを催し、地元高槻の魅力を輝かす地域活動を進めてきました。が、「摂津響Sal」さんと共催で開いた今回のコンサートには、38名の音楽ファンが集いました。

出演者はクラリネットの森健太郎さんとピアノの山口美樹子さん。お二人はいずれも、フランス、ドイツの音楽院などを卒業された実力派です。

ベートーヴェン、モントゥイ、ドビュッシー……ときて、スメタナのモルダウの素晴らしかったこと。森の小さなコ

ンサートサロンは、私たちが歌うポランドやフランスの民謡で、さぞ楽しかったです。 (J A F S 高槻地区会 齋藤かおる)



みんなであきました



守られ1400年 狭山池の歴史学ぶ

大阪府大阪狭山市に、築造されてから1400年の歴史があり、日本最古の人工池として知られる「狭山池」があります。狭山池と、この存在を広く伝え、これからの世代に残していくためにつくられた『狭山池博物館』を9月9日、地区会員4人と見学しました。写真。

当日は地域の勇壮な「ダンジリ」と出会い、参加者と楽しみながら狭

山池へと向かいました。

同博物館の建物は、世界的な建築家・安藤忠雄さんの設計です。アプローチにある大きな滝に、まず感動しました。ボランティアのガイドの方が館内を案内してくれ、狭山池の歴史などを説明してくれました。

池は古墳時代に築造されて以来、先人たちの様々な土木技術を駆使して何度も改修された。奈良時代の行基、鎌倉時代の重源による改修、さらに江戸時代の改修など、多くの人々の手によって守られてきた。特に平成の大改修は14年をかけた。農業用水とともに洪水を防ぐ治水ダムとする工事が行われた。最後に狭山池の歴史をつないだのは、大阪狭山市で育った考古学者の末永雅雄博士の存在である……。

いつの時代にも歴史に名を残す人物が現れ、人々の生命・生活を守るために努力したのです。人間の底力を改めて見た思いがしました。これからも皆で楽しみながら、アジア協会アジア友の会を通し、アジアの国々の支援活動を長く続けていきたいと思っています。

(J A F S 富田林地区会代表 沖田哲男)

学卒業したての田辺朔郎技師がやり遂げました。この疏水の水が京都の水道水、農業用水、工業用水、水力発電、下水、水運などに幅広く活用されたのです。

9月13日、この琵琶湖疎水沿いを自然塾で歩きました。大津港からスタート。琵琶湖からの取水口を見ながら歩きました。

疏水がトンネルに入ると、歩行者は峠の小関越えです。下り路は台風

がトンネルに入ると、歩行者は峠の小関越えです。下り路は台風



近代京都の大事業 琵琶湖疎水を見る

幕末の動乱や東京奠都でさびれた京都を元気にしようとした明治の国家的大事業が、琵琶湖の水を京都へ流す「琵琶湖疎水」事業でした。大



なにわの埋もれた 歴史文化を訪ねる

なにわ西地区では、主に大阪の歴史、文化を訪ねるウォークを催しています。沖本然生先生。写真中央の説明している人。浪速への深い愛情をバックボーンにした楽しい案内、解説に熱心なファンが多く、楽しんでいただいています。また、ウォークの成功は、地区スタッフの尽力とチームワークのおかげです。

目的はアジア地域の恵まれない人々への支援資金を集めるためですが、イベントを企画するときはいつも、参加される方々の立場に立って楽しんでいただける、また次も来よう

21号で樹々の多くが道をふさぐように倒れ、乗り越え、潜り抜けが大変でした。

京都側へ降りると、高度差対策のインクライン横を歩いたり、快適な疎水沿いの道が続ぎ、南禅寺の立派なレンガ造りの水路閣まで歩きました。写真。このあと疎水は鴨川から伏見、宇治川へとつながります。

(J A F S 自然塾塾長 東久保勝彦)

イドして、大阪市住之江区にある加賀屋緑地(旧加賀屋新田会所跡)を訪問した。緑地内の書院、数寄屋風の茶室の鳳鳴亭、小堀遠州風の築山臨泉回遊式の庭園、土蔵を見学し、素晴らしい庭園、粋を凝らした建物を満喫した。

近くに残る防空壕の中も見たいという希望が出され、興味津々、見学した。さらに住吉公園に移動し、鎌倉時代末の創建で日本初の灯台と言いつい伝えがある高灯籠を見学した。写真。住之江のまち案内ボランティアの渡辺氏に説明を受け、灯籠内の螺旋階段を頂上の物見窓まで上って付近の景観を眺望した。

その後、汐掛道を、住友灯籠・松尾芭蕉の碑などの説明をしながら、南海電車住吉大社駅まで歩いた。(J A F S なにわ南地区 實清隆)



加賀屋緑地を見て 高灯籠に上る

秋晴れの10月13日、住之江のまち案内ボランティアでもある私がJ A F S なにわ南地区の会員ら13人をガ

天平のカリスマ僧・行基さんに学ぼう

第5弾「JAFS社員クラブ」が、10月29日、大阪市天王寺区のホテルアウリーナ大阪・レストランカステロで40名が参加して開かれました。今回の卓話者は、奈良県知事特命参与・前奈良県まちづくり推進局長でJAFS社員会員でもある金剛一智さん。「行基さんに学ぶ『天平のカリスマ僧 土木事業による民衆救済』」をテーマに話し



てもらいました。写真。

2018年は行基さん生誕1350年です。行基さんは76歳から奈良の大仏建立の実質的な責任者を務めました。それまでの行基さんの活躍はご存知でしょうか。行基さんは「土」「水」の技術者であり、民衆の中に入り、民衆とともに日本で初めてのNPOを立上げ、「利他行（自分よりも他人の利益を優先する行）」という仏教の教えとしての土木事業を行った人です。

民間のリーダーであり、プランナー、経営者でもありました。現在の堺市西区にある生家の家原寺建立から始め、49の寺院・橋・池など多くの建設事業を行いました。今も現役の狭山池、久米田池のほか昆陽池による伊丹の開発、枚方・寝屋川・門真・守口など淀川左岸の開発、淀川の治水対策など今の関西の礎を作りました。その行いは後の多くのお坊さんに引き継がれていきます。

行基さんからは、利他行を行うこと、これからの日本は民間の力を高めることやNPO・NGOの力を高めることが大事であるということ学びました。

（JAFS第1エリア社員クラブ世話人 石原基義）

●日通旅行株式会社

当社は、日本通運株式会社との旅行事業として1954年（昭和29年）から旅行業を展開し、以来60余年の歴史を引き継いでおります。

そして2012年10月1日に日本通運株式会社から旅行事業部が独立し、旅行専門会社「日通旅行株式会社」として

て営業を開始いたしました。日本通運株式会社から旅行事業が独立したことで、さらなる専門性と機動性を高め、日本通運グループ内でのグローバル展開と歩調を合わせながら、よりお客様のニーズに添ったサービス提供の実現に努め、人々の交流を通じてグローバル社会へ貢献してまいります。

その一環として、「カンボジア社会貢献活動・ボランティア活動体験」の募集を行なっております。どうぞ引き続き変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

1954年創業の旅行業界のパイオニア



カンボジア社会貢献活動「井戸寄贈」・ボランティア活動体験
世界遺産アンコールワット観光 6日間

旅行期間 2019年3月24日(日)~3月29日(金)

日 程	発着都市	現地時間	内容・宿泊地
1	関西空港発	10:30	空路、カンボジアの首都プノンペンへ
2	プノンペン着	17:00	着後、ホテルへ
3	プノンペン	終日	社会貢献活動 井戸を寄贈 文化交流事業 村人との交流会 <プノンペン泊>
4	プノンペン	終日	現地学校訪問 日本のマンガ本を寄付 平和学習 <シェムリアップ泊>
5	シェムリアップ	終日	世界文化遺産観光 アンコールワット観光 <シェムリアップ泊>
6	シェムリアップ	終日	かものはしプロジェクト学習 ボランティア活動体験 <シェムリアップ泊>
7	関西空港発	21:35	空路、帰国の途へ
8	関西空港着	07:20	入国・通関後、解散 <国内泊>

研修企画：JAFS 公益社団法人 アジア協会アジア友の会

旅行企画・実施：日通旅行

大阪市中央区北浜1-1-6
日通北浜ビル3階
(大阪支店)
☎ 06-6231-0303
HP <http://www.nittsu-ryoko.co.jp/>
担当：松村・河村

新・The 社会貢献

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

●エステイトレーディング株式会社

代表取締役の私 垂井信哉 写真は、化学品専門会社に30年間勤め、平成18（2006）年に起業いたしました。苛性ソーダ、次亜塩素酸ソーダ、塩化カルシウムなど、無機化学工業薬品を主に取り扱っております。

も取り扱っております。その他、中国より、ビタミンC、クエン酸、ほか炭酸リチウム等レアメタルの輸入販売も行っております。

最近、ベトナムのホーチミン、モンゴルのウランバートルに向けて、フコイダン（もずく）、ナットーキナーゼ（納豆）などの健康食品、しょう油、みそ、みりんなどの調味料の輸出も行っております。

また、経歴の浅い会社ですが、10年後を指してがんばって参ります。



大阪市中央区南船場2-4-23
☎ 06-6282-7178
代表取締役：垂井信哉

募集 “寄付”は物品でも受付してます
もったいないを力に！

- 洋服
- アクセサリ
- 本
- 靴
- ボランティア

寄付いただいた物品は、チャリティーショップ KANAU で販売。
その売上がアジア協会の支援活動に役立てられます。



受付先 ▼ 火曜定休 10:00～18:00 JR 寺田町駅より徒歩 10分
〒544-0025 大阪市生野区生野東 2-2-15 ☎ 090-4161-0236

個人情報につき非掲載

ホームページからオンラインでの 入会申込み & 寄付クレジットカード決済 始めました

これまで入会申込みいただく際は、申込用紙に記入し郵送いただく必要がありましたが、当会HP上の入会フォームからオンラインでお申込みいただけるようになりました。

また寄付・募金をいただく際、これまでの郵便振替と銀行振込に加え、HPからクレジットカードでご寄付いただけるようになりました（オンライン決済サービス「ペイパル」）。

●入会

HP（<https://jafs.or.jp/>、もしくはJAF Sで検索）のトップページ⇒オレンジ色 [入会する] バナー⇒ [入会フォーム] に必要事項を入力⇒送信⇒ [入会お申し込み完了] 画面の案内に従って会費納入をお願いします

●寄付・募金

HPのトップページ⇒オレンジ色 [寄付] バナー⇒ [寄付のお振り込み方法◆クレジットカードで寄付] の項目⇒寄付・募金の種類を選び、領収書希望の方は名前を入力⇒黄色ボタン [カードで募金] を押すどうぞお気軽にご利用ください。お知り合いの方へもご紹介よろしくお願いたします。

里子の笑顔

勉強したくても経済的な理由で学校に行けない、進学のを絶たれる。アジア協会ではそんなアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。今回はインドの里子の生活をお伝えします。

「アジア里親の会」里親募集

- 対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリピンです
- 会費は里子1人年額20,000円。複数も可です
- 里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

「会ったことないお母さん」を支えに

インドのおへそ部分に位置するナグプール(ナーグプル)。大規模な地下鉄工事が進んでいて、インドで13番目に人口が多い都市です。抱える問題は貧富の差と、無計画な発展によるスラムの増大。ナグプールには400を超えるスラムがあるとされています。その子どもたちに教育の大切さを伝えたいと活動しているのがAFSナグプールのチャイルド・アカデミーです。現在、42名の子どもをアジア里親



の会で支援しています。親たちはほとんど教育を受けておらず、工事現場の非正規雇用で家族を養っています。学校の先生になる夢を持っているサクシちゃん(6年生) Ⅱ写真Ⅱの悩みは、学校から戻ると優しく迎えてくれる祖母の体調が悪いこと、経済的に不安定で心を病んでいる父親が、大酒を飲んで酔っ払うことです。スラムには水道もトイレも完備されていません。行政の給水車が毎朝来ます。その水をもらいに行くのがサクシちゃんの日課です。その彼女の支えが教育里親です。「私には会ったことないけど私を守ってくれるお母さんがもう一人います」と毎日、学校と家の仕事をこなしています。現在、サクシちゃんの住んでいる地域で、新たに6名の子どもを里親を募っています。

(JAFSスタッフ 熱田典子)

アジアの友から

BSVIA(インド)
現在大阪在住にて企業勤務
アダーシユ・クンパール
(翻訳:JAFSスタッフ 川本裕子)



私はインドのカルナータカ州ビジャプールで生まれ育ち、経営学修士を取得しました。強みは、できると信じてチャレンジすること、成功も失敗もバランス良く経験しようという考え方です。モットーは、自分の成長の機会は逃さないことです。日本は世界で最も多様性のある国の一つです。寺や城、魅力的な自然など、見どころがたくさんあります。外国で働くことに興味を持つ多くの人を惹きつけ、活気に満ちています。何でも揃っていて、全てが清潔でサービスも良く安全です。日本にこれまで7週間住んだ経験から学んだことをまとめます。日本人は働きすぎだと思います。日本に来る前、私は最終的に日本のビジネス界で働きたいと思っています

日本に住む夢がかなった

ですが、今は迷っています。しかし日本での生活は、本当にチャレンジングで、心底すばらしいものです。7歳の頃に日本人と縁ができました。亡き父がビジャプールにBSVIAというNGOを創設しJAFS村上事務局長と知り合ったのです。BSVIAはJAFSの支援も得て、井戸を掘り、コスモニケタン学園を創りました。この間、頻繁にビジャプールを訪れる日本人たちに感銘を受け、また父に刺激を受け、日本について学びたいと思いました。今、夢が叶っています。OSGコーポレーション創業者の湯川剛氏(JAFS副会長)と出会い、支援くださったことで日本に来られました。実際来てみると、日本人の性質は私と似ています。今まで日本に暮らした中で経験したことは、父や兄弟から聞いた90年代の様子とは少し違っています。今、日本は大きく変化しています。おそらく他のアジア諸国の発展によるのだと思います。日本には、他国の手本となる豊富な文化を、将来にわたって維持してほしいと願います。日本についてまでもっと知る必要があります。皆さんの協力をよろしく願います。

環境コラム

新年:そんな人間の節目に自然の生き物は関知せず、それどころか人間に思いもつかない独自の驚くべき方法で、季節を絶妙に感じて巧妙に生き抜きます。小さいけれど感動を覚えるほどすごい虫たちが、わが家の小さな庭にもいました。【ミノムシ】子どものころ秋に見かけたミノムシ。このごろ見ないと思っていたんですが、なぜか10月わが家で20匹以上の大発生!どうしたこと?と調べてみて、ミノムシの生態に驚きました。ミノの中には蛾の幼虫ですが、成虫になって羽が生え飛び立つのは雄のみ。雌は成虫になっても羽も脚も生えず、生涯ミノから出ぬまま。雄雌とも口は無く何も食べないそうです。ミノに入ったままの雌の存在を、フェロモンによって雄は見つけ飛んできて、ミノ中の雌と結婚。雄は直後に、雌もミノ中で産卵後、役目を果たした両者は命を絶えます。子孫を残すことに切ないほど徹して命を捧げる生物の真髄に触れた気がしました。

小さくてもすごい虫

オトシブミ。名の由来は、江戸時代、巻紙の手紙をこっそり道に落として人に渡した「落とし文」。

オトシブミの雌は、葉に切目を入れて巻き、中に卵を産んで地面に落とすのだそう。孵化した幼虫は巻葉内の葉を食べて中で蛹になり、蛹った後の子の面倒を見られない母が、わが子を守るためにできるだけのことをしておくのです。人間を中心とした他の生き物は脇役に考えがちですが、人間とは無関係に生き物はそれぞれの生きる戦略で命をつないでいます。小さくてもすごい虫たちに目を向けるひと時は、人間は地球の全生物870万種の1種にしか過ぎず、生き物の重みは一つひとつ同じなんだと思わせてくれました。(JAFSスタッフ 川本裕子)

冬季募金お願いします

旧年中は皆様にご支援いただき、ありがとうございました。12月にご案内させていただきました「冬季募金」はまだ受付けております。アジア各国の友も新年を幸せに過ごせますよう、ご協力よろしくお願ひ申し上げます。HPからクレジットカードでも募金いただけます。

入会のご案内

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

- | | | |
|-------------------|------|----------------------------|
| A. 維持会費 | 年額1口 | 12,000円
(月額1,000円) |
| B. 賛助会費 | 年額1口 | 6,000円
(月額600円=振込手数料含む) |
| C. ジュニア会費 (高校生まで) | 年額1口 | 1,000円 |
| D. 団体会費 | 年額1口 | 20,000円 |
| E. 法人賛助会費 | 年額1口 | 50,000円 |
- 会費・寄付の振り込み先**
郵便振込 00960-6-10835
三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711

編集後記

初 訪問した仏教国ラオスで、無数の仏像が両掌を相手に示す姿が印象的でした。「戦争反対」の意思表示だ。古代から戦が絶えず、50年前もベトナム戦争に絡んで米軍が空爆、その不発弾処理が今も続いています。(督)

今 年は元号が変わる。平成に変わったとき国外にいたため、変わる瞬間や、日常生活の変化を体験できず、半年後に帰国して、世の中平成になっていることになじめなかった。今回はじっくりこの目で見たい。(和)

中 国の野や森に何万台と捨てられたシェア自転車の写真が、9月18日の朝日新聞に載りました。もったいない。強欲開放経済の末路を見るようです。ほんの一部でも、本場に必要近隣の国々に贈れないでしょうか。(黒)

去 10月に開催された「アジア国際ネットワークセミナー」には、初めてのメンバーも多く参加。お互いの絆を深めるだけでなく、次世代リーダー育成の場にもなっていることを再認識できました。(裕)

30 年のJAFSとの関わりの中で初の編集です(緊張!)。「SDGs」は大阪にあっては万博誘致に引っ張りだこ。持続可能な社会のために見落さない活動を、編集とともに身を引き締めて臨みます。(典)



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人々を支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会



▲「アジア里親の会」の里子サクシちゃん
が描いた絵＝インド・マハラシュトラ州
ナグプール、チャイルド・アカデミー。30頁に
関連記事

◀表紙の写真 豪雨被害で壊れた家の
屋根を、瓦リレーで協力して修理する
村人たち＝インド・マハラシュトラ州
ガッチロリ、バルラガル村。9頁に関
連記事

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL：<https://jafs.or.jp> E-mail：asia@jafs.or.jp

2019年1月 136号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：熱田典子、岩崎準一、大本和子、柿島裕、

金井英夫、川本裕子

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社